守　門　袴　岳　山　行　記　録

目的地	守門袴岳	期　日	平成１７年４月２４日（日）
山行人	笠原正雄単独	特　記	アイゼンとピッケルに慣れること

地　点　名	（着）～（発）	天候	記　　事
与　　板	午前 5:45 発	快晴	守門の頂には雲がかかっている。
除雪最終地点	6:45～7:00	〃	３週間前より雪が減っていて、時間も少し早いせいか好位置に駐車。
渡　　渉	8:00	〃	猿倉橋を目指すがまたしても踏み跡に惑わされて藤平山方向に向かってしまった(7:25)。丘を登るがおかしいと思い進路を左にとり、沢を探しガケ地を降りる。橋の 50m 程上流だった。そこに戻るには崖を登って越さなければならない。しかし、幸いにも石伝いで右岸に渡ることが出来た。
登　山　口	8:05	〃	正規ルートに上がると、後発者１人(A 男)が橋を渡って来るのが見えた。
ヘリに僅か夏道	8:20	〃	アイゼンをつける。A 男が右手を登って行き、追い越される。ブナ林の中の急登は両手で前方にピッケルを刺しながら上った所もある。
ブナ林中間点	8:45	〃	少し傾斜が緩む。追い越していった A 男に追いく。一緒に立ち休み。ルートを教わる。夏道はもう少し右の沢のへつり道だそうだ。連休に駒ケ岳へ行くので足慣らしに来たと言う。しばらくは共に登る。
稜線に上がる	9:20	〃	中の高地沢の向こうに大岳が見える。緩やかに登り、やや下る。
谷　内　平	9:30～9:35	〃	広々の平。A 男を撮ってやる。この先へ進むと尾根が序々にやせて来る。
中間点小ピーク	10:10～10:20	〃	標高 1,000m の標識。オカバミ滝が見える。少し夏道が出ている。この手前から B 男が後ろを歩いて来た。このあたりの狭い尾根は雪の厳しい時には、ナイフエッジになると聞く。彼も毎年連休に駒ケ岳へ行くと言う。A 男・B 男とも同年代かつ同類項で嬉しくなった。A 男が軍手を置き忘れて行った。ザックに結び着け持って行ってやることとした。B 男と同時に出発するもすぐに先行される。この前後、何人かに追い越される。
米山を撮る	10:50	〃	尾根も広くなって、振り返れば、権現堂を始め魚沼方面が良く見える。
大　岳　分　岐	11:40	〃	休み休み、ひたすらの登り。大岳のスキー人を双眼鏡で見る。エビの尻尾現れる。昨夜からの新雪を踏むうち粟ケ岳のピークが現れ思わず歓声。山頂へ続く道中 A 男が下りてくる。軍手を渡す。7 年前に登山口で携帯電話を落としたことを思い出す。下田からの沢を登りつめる集団が見える。
袴　岳　山　頂	12;15～1:25	〃	追い越していった長靴・2 本杖の夫婦ほか数人。沢登りの集団（男女混成八十里友の会）が上がってきて賑やかになる。大白川ルートのスキー人も上がってきた。この上ない快晴で風も殆んど無い。川内、飯豊、三山、燧ケ岳と山、山、山だ。久しぶりにビールで乾杯する。B 男もそばに居て話をする。「今朝は女房に内緒で、そーっと家を出て来たいや！」と言う。いやはや。それに比して我が女房殿は理解があって、有難や有難や。
谷　内　平	2:25～2:30	〃	アイゼンをワカンに履き替えて下る。ワカン下りはやはり早い。八十里友の会も下っていて、踏み跡が広くなる。ここで１枚脱ぐ。少し登り返して尾根を進み、左折してブナの急降下へ。途中ワカンを外す。
登　山　口	3:00	〃	猿倉橋の袂に建物が雪に埋もれている。後でトイレだと聞いた。
除雪最終地点	3:35	〃	守門温泉「青雲館」で入浴。帰路 R290 の道端でフキノトウを採る。

７年前５月に登ったコースだ。ブナ美林を憶えている。大岳分岐での残雪も記憶にある。但しコースの様子は全く忘れてしまった。青雲湿原での昼食時、虫がまとわりついて不快であったため、好印象は無い。しかし今次雪の季節に虫は居ない。大快晴で素晴らしい一日であった。出だしの道迷いで一丘を登ったこととブナ林の登りとで、予想以上に体力を消耗した。景色は大岳よりこちらがいい。また、大白川からのコースも気分が良さそうだ。

時期は春が進んだものの 3 週間前の再挑戦が出来て満足である。